我を隠すは紅き月か

冥界寺吹雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
我を隠すは紅き月か

【Ｎコード】
Ｎ１０４９Ｅ

【作者名】
冥界寺吹雪

【あらすじ】
私が待望したあの子の小説です。私の他の作品と同じ人物が数名登場しますがキャラ設定は完全に異なっていますので悪しからず（特にラクト・ガール）

序幕（前書き）

東方Ｐｒｏｊｅｃｔをご存知な方向けではありますが、ご存知ない方も是非どうぞ

序幕

ゴーン　ゴーン

深淵にも轟く、低く、深い鐘の音。

ゴーン　ゴーン

静寂を乱すその音は、誰が為に鳴るのだろう。

ゴーン　ゴーン

その意味を知ることなく

ゴーン　ゴーン

一年に一度鳴り響く、その鐘の音は

ゴーン　ゴーン

495回目

第一話◆静始

紅い照明に照らされただだっ広いロビー。隅の方に置かれた小さなテーブルに座った少女は、ティーカップを口元に運ぶと、受け皿に静かに戻す。カチャン、と小さな音が部屋全体に響き渡っていく。

「本日の紅茶は如何でしょう。人間界から取り寄せた特注品を、うちの茶畑で摘んだものとブレンドした特製の茶葉を使用していまして」

テーブルの横で礼儀正しく手をエプロンの前で揃えてお盆を抱えるメイドは少々控えめな口調で紅茶の茶葉の話を披露する。椅子に座る少女はふぅ、とため息をつくと、

「まぁまぁね」

と漏らし、再び紅茶を啜る。二人の会話とティーカップの音のみが響く、不気味な紅い空間。

椅子に座り、先程から紅茶を啜っている少女はレミリア・スカーレット。この巨大なロビーをもつ館、紅魔館の主であり、長きにわたりこの館を守ってきた。
少女と思われる容貌だがしかし、彼女は既に人間が生きることの出来る年月を遥かに超える程長くこの世に留まっている。それは、吸血鬼である彼女には当たり前のことであり、館の者もそれを当然のものとして捉えている。

そのうちの一人が館のメイド長、先程からレミリアの隣で礼儀良く直立している十六夜咲夜（いざよいさくや）。レミリアより年上と見えるも、彼女はれっきとした人間でなので吸血鬼であるレミリアより遥かに年下である。

そんな二人は特に何をするわけでもなく、咲夜が紅茶をいれてはレミリアが飲むといった不思議な日常が出来上がっていた。出来上がっていたのだが。

「・・・近頃鼠が多いようだけど、門番は何をやってるのかしら？」
「どうも力の強い人間が館を訪れるようになったとかで・・・。お嬢様には簡単には近づかせませんのでご安心を」
「もっとも、私に近づく程度の人間ならたいした実力者ではないでしょう」

咲夜は、そうですね、と口に手を当てて微笑する。

「その鼠、私の図書館の本を荒らして困ってるんだけど」

二人だけの空間だったロビーに第三者の声が響いた。扉が閉まる音の方を見ると、紫色の服を着たこれまた少女の姿。

「あらパチェ。あなたのところには小悪魔がいるじゃない」

「何度ドデカいスパークに焼かれて召喚し直したかしらね。ただでさえ喘息気味なのにゲフッ、ゲフッ・・・」

「ああもう大丈夫？咲夜、パチェにも紅茶を」

「かしこまりました」

パチェと呼ばれた少女はパチュリー・ノーレッジ。紅魔館の巨大図書館を管理している魔女であり、彼女も人間では想像もつかない程に長生きをする。その割にこの館では一番幼いのではないかと疑われる程の容姿の持ち主で、喘息持ち。

「全く、長い間外界との交流を絶ったスカーレット家が今更鼠を相手にしなければならないとは・・・。人間どもは吸血鬼の恐ろしさを忘れたのかしら」

ため息混じりにレミリアはパチュリーを眺めて言う。パチュリーも、全くね、といった具合に頷き、咲夜からカップを受け取る。

が、そのカップはパチュリーの手に渡ることなく床に叩きつけられた。

「な、何ですかこの揺れは!?」

近年体験したことのないほどの大揺れが突如ロビーを、いや、紅魔館全体を襲ったのだ。

揺れは一時的なもので、おさまると咲夜はいち早く床に散らばったカップの破片を回収する。パチュリーは全く状況が飲み込めず、というか飲み込もうともせず、ただ床に広がる紅い液体を惜しそうに見つめていた。

「・・・鼠の仕業にしては派手ですね・・・。この地域で地震なんて、滅多にないのに」

咲夜が言うと、レミリアは首を小さく横に振る。

「いいえ、鼠の仕業ね」

「と、言いますとパチュリー様のところに出る鼠が有力ですか」

「・・・そうね」

神妙な面持ちのレミリアはカップを受け皿に戻すと、ゆっくりと椅子を引いて立ち上がる。俯き加減のその姿はその場にいるもの全てを畏怖させる程に怒りを感じさせる。

「鼠は時として柱をかじり、強靭な家でさえ崩すことがある。しかし鼠は、柱をかじるという行為が家を壊すということに繋がることを知らないの。だから鼠は愚かなのよ」

機嫌が悪いのを隠す様子もなく、多少荒々しい口調で言う。

「ええと、つまりその人間がこの館を攻撃していると？」

レミリアは、違うわね、と首を振り、ロビーの出入口に向かって歩き出す。

「柱をかじる鼠もやがて崩れる家に潰されるわ。後始末は結局家の主の仕事。・・・本当、やってくれたわよ」

捨てるように言うと、巨大な扉を押し開けてロビーから去っていっ

た。残された二人は顔を見合わせ、

「あ、紅茶入れ直してきますね」

咲夜は言うが、パチュリーは咲夜の服の裾を引っ張ってそれを止め、

「私も行くわ。咲夜、着いてくる？」

そして後には誰もいなくなった

「湖のほとり・・・。あの館の方かしらね」

立派な鳥居が構えるそこそこ大きな神社の境内、一人の巫女が、遥か彼方の空に舞い上がる粉塵を眺めながらぼやく。

「全く、無鉄砲というか何と言うか・・・」

彼女の名は博麗霊夢（はくれいれいむ）。妖怪勝りの人間、賽銭の鬼、第六感の化身等様々な呼び名があるが、彼女の前でそれを口にした者はいない。というか、いなかったことにされてしまう。

霊夢は小さいため息を一つつくと、鳥居を抜けて歩きだす。厚い雲に覆われた空を見上げ、

「いるんでしょう？」

「あら、よく分かったわね」

霊夢の視界に入った空間の一部に突如亀裂のような黒い線が浮かび上がる。それは次第に膨らみ、飴玉を包む紙のような形を作りだす。

「珍しいじゃない、貴女がわざわざあの黒い奴の為に動くなんて」

黒い亀裂からひょっこりと少女が顔を出す。何とも不気味な絵では

あるが、霊夢はそれに慣れているようで、抵抗も無しに会話をする。

「あいつの為、ねぇ。そう言われるとそうなのかもしれないけど・・・」

「お得意の直感ってところかしら？うふふ、貴女らしいわね」

亀裂から顔を出す彼女は八雲紫（やくもゆかり）。空間と空間を境界で結ぶ力を持つ変わり者。とはいえ、彼女の回りの者もそれなりに変わっているため、特別目立つという訳でもない。

「で、着いてこなくてもいいんですけど」

ぶっきらぼうに霊夢が言うと、紫はどこから持ち出したか扇子を口に当ててくすくすと笑う。

「あら、私も直感で移動しているだけよ？」

霊夢は再び、今度は深くため息をつくと、何を言う訳でもなく歩き続けた。

「くそ、何だっていうんだ？この馬鹿でっかい爆発は・・・」

紅い屋敷の地下、白と黒の魔法使い霧雨魔理沙（きりさめまりさ）は立ち込める砂煙を手ではらいながら言った。辺り一帯は砂埃に包まれ視界が悪く、現状が把握出来ない。

「扉を開けただけであの爆発とは・・・部屋を守る罠にしろ、部屋自体吹き飛んじゃあ意味ねーんじゃねえか？」

次第に砂埃が薄れると、目の前には崩れ去った天井と瓦礫の山が映し出されていた。館に勝手に忍び込んで勝手に壊したというのに、本人にその自覚はない様子。

「ここまでくればすげーお宝の一つや二つ出てきてもおかしくないと思うんだがねぇ」

なんて呑気なことを言っている魔理沙の口が突如止まった。視線は瓦礫の奥の方から止まって動かない。先の先に見えるそれは、暗くてはっきりとは見えないが、確かに人の形をしていた。

「誰かいるのか？」

ようやく言葉を放ったが、それに対する返答はない。確かめられずにはいられない魔理沙は瓦礫の山に手をかけ、上っていく。次第に影のように見えていた人の形がはっきりと見えるようになり、少女であることを見破るのに大した時間はかからなかった。

先程の爆発で少し破けたのか、薄いピンク色の小さな服を着たその少女は動くこともなく目の前を見つめているようだった。魔理沙はその少女に見覚えがないらしく、物珍しそうに少女の顔を眺めると

「うにゃ、見かけない顔だけど・・・こちらにお住まいかな？」

返事がない。ただの屍・・・ではなく、直立した少女は真っ正面からジロジロ見てくる魔理沙に少しも動じることなく、何も答えない。まだまだ子供の顔立ちだが、何故か無表情なところが魔理沙は気に食わないらしい。

「むぅ、じゃあ名前。名前は？」

思い出したかのようにパンと手を叩いて魔理沙は言う。

「フランドール」

顔に見合った幼い高い声で少女は名乗った。それを聞くと魔理沙はにこっと笑顔を作り、

「フランドールか。私は霧雨魔理沙だ。よろしくなっ」

と言い、右手を差し出す。

無言のフランドールはそれに応じようとはせず、ただ黙って差し出された手を見つめていた。

「あ、ええと。握手だよ握手。お互い手を握りあって、よろしくなってやるんだ」

魔理沙が言うと、フランドールも右手を差し出し手を握る。何と言うか、やりづらそうに魔理沙は頭を掻いてそして思い出した。

「ああそうだ、早くここを出ないとやばいんだった」

慌てて近場に散乱した瓦礫を越えようと駆け出したのだが、それは服を引っ張られて阻止される。

「フランドール？・・・何だ、行くなって言うのか？」

ふるふると首を振るフランドール。

「んじゃ何だ・・・連れていけってか？」

今度はこくん、と頷く。まいったなぁと魔理沙は呟きつつも迷っている時間はない。仕方なくフランドールをつれて瓦礫の山を後にするのであった。

「・・・」

無言で立ち尽くすレミリア。眼前には、無惨にも崩れ去った瓦礫が積み重なっている。

「お嬢様・・・！。なんですかこの瓦礫の山は！？」

後ろから追いかけてきた咲夜が慌てて叫ぶ。パチュリーはその惨状を見てふぅ、と息を吐きレミリアへ歩み寄る。

「これは派手にやってくれたわねぇあの鼠。・・・にしても、あの

スパークの力でこれほどまでに豪快に壊れるのかしら」

「鼠の仕業じゃないわ。それに部屋の一つや二つはどうでもいいの」

その表情こそ冷静なものの、明らかに怒りのこもった声でレミリアは言う。崩れ去った瓦礫を軽く蹴り、そして舌打ち。

「すぐに追っ手を用意しますので・・・」

「いいえ、その必要はないわ」

咲夜に割って入るレミリア。

「・・・私が追う」

あまりに威圧感のあるその声に一時その場は静まり返る。

「・・・あら、いつもは館から出ないレミィが、珍しいのね」

「咲夜、後始末は任せたわよ」

咲夜は、かしこまりましたといつもの調子で丁寧なお辞儀をし、その場を去った。

「パチェ、貴女はついてくるの？」

「そんなわけないでしょう・・・といいたいところだけど、あの鼠に持っていかれた本を返して貰わないといけないのよね」

「・・・ありったけの鼠捕りを用意しなさい」

夕暮れももう近い。

第二話◆遭遇（前書き）

ものすごーーーーーーく間が開きましたか連載再開です。

第二話◆遭遇

湖の湖畔、物凄い速さで館を脱出した魔理沙とフランドールは既に館が見えない程遠くまで走っていた。

「はぁ・・・はぁ・・・。ここまで来ればもう大丈夫だろう。で、問題はフランドール、こんなところまでついてきて大丈夫か？」

こくんと頷く。あれほど走ったというのに呼吸の一つ乱す様子もない。

「うーん、まぁ調度暇になったところだしな。どこか遊びに行くとでもするか」

魔理沙が言うと、フランドールは行く行くとばかりに小さく笑顔を作ってこくこく頷いた。初めて見るフランドールの笑顔に魔理沙も目一杯の笑顔で返し、歩き始めた。

「――で、何で私の家なのかなぁ・・・」

暇潰しの被害者は森に住まう人形遣い、アリス・マーガトロイドに決まったようだ。

「いいじゃねーか。お前のところならいつも暇だろ？」

「失礼ね！・・・まぁ、たまたま暇してたところだけど」

彼女も魔理沙と同じく魔法使いだが、人間の魔法使いである魔理沙に対しアリスは純粋な魔女。まぁ、だからといって何が違うっていったこともないのだが。

「・・・で、さっきから私の人形をコネコネしてるその娘は？」

涙ながらに跡形もなくなった人形の片付けをしながらアリスは問う。

「ああ、フランドールっていうんだ。・・・フラン、私の知り合いのアリスだ」

「知り合い・・・」

突然いじけ始めたアリスは置いておくとして、フランドールは隅でいじいじするアリスをちらりと見ると、特に興味を持つ訳でもなく目の前の人形コネコネに没頭するのであった。

「まぁ色々あってな。今二人で絶賛暇してたんだ。いやはや、いい親友をもってよかったぜ」

「親友!?・・・あー待ってて。今すぐにお茶菓子持ってくるねっ」

アリスはころりと笑顔になると大量の洋菓子を乗せたお盆を運んできた。色とりどりのお菓子達に最初にとっついたのはフランドールだった。

「これ、おいしい?」

と、バームクーヘンを手に持ちながら言う。

「食ってみるといいさ。んじゃ私も一つ・・・はむ」

二人同時に口に頬張ると、その表情は噛めば噛むほど笑顔になっていく。

「うまいな、これ。霊夢んところの煎餅もいいが、たまにはこういうのも悪くないぜ」

「ホント?魔理沙って普段何を食べてるのか分からないからちょっと不安だったんだけど・・・。フランドールちゃんもおいしい?」

「うん、おいしい！」

満面の笑みとはこの表情のことを言うんだろう。それほど美味しかったのか、手に取った分はあっと言う間もなくその口に飲み込まれてしまった。

「あんまり慌てて食うと詰まらせるぜ？むしゃむしゃ」

「魔理沙もね」

山盛りのお菓子も、二人の手にかかれば手品のようになくなってしまったのであった。

「フランの食い気には驚きだぜ。アリス、そろそろ夕飯の時間だなぁ」

「魔理沙もね。というか、夕飯までたかっていく気なの？」

はぁ、とため息をつくとアリスは立ち上がり、キッチンに人形を差し向ける。器用なことに人形達はまるで意思を持ったかのようにフライパンを、食材を、包丁を操りだす。なんとも不気味な光景ではあるが、まぁ見る人が見ればメルヘンチックに見えなくもない。

「自分では作らないのかよ」

「作ってるわよ。私が操ってるんだもの」

確かにアリスの手は糸のような何かを引いたりする動作をしている。

「見かけによらず器用なもんだなぁ。私なんか長らく料理なんてしてないものだから人形なんて操れないぜ」

「魔理沙になら今度教えてあげるわよ？人形もそこそこ余ってるから」

「だってよフラン。お言葉に甘えようか？」

「お人形さん？ほしいほしい！」

アリスのひきつった表情は見なかったことにして、魔理沙とフランドールは今日何度目かの笑顔を見せた。二人の笑顔はどうしてこう並べてみると輝かしいのか、アリスは静かな息をつくとこちらも小さく笑顔を作っていた。

「あーあ、こりゃまた見事な大穴だこと」

紅白の巫女、博麗霊夢は目の前にぽっかりとあいた、隕石でも衝突したかのような大穴を見てそんな声をあげる。

紅魔館。いつもならば門番なりメイド長なりの奇襲があるものだが、今日はやけにひっそりと静まり返っていた。

「さっきから通りすがるメイド達も攻撃してくる様子もないし・・・。まぁ楽でいいけど」

攻撃してこないのは何か別に理由がありそうなものだが。

「あら、紅白の巫女じゃない」

霊夢にとって聞き覚えのある声に振り返ると、予想通りの顔が腕を組んで立っていた。

「咲夜じゃない。なかなか出てこないから、てっきりいないのかと思った」

「いないからといって勝手に人の家にあがるのはどうかと思うわ。いるけど」

「ノックしたわ」

挨拶代わりの会話を終えた二人は同時に目の前にあいた巨大な穴を見る。

「・・・で、これは」

「さぁ」

ごまかしたつもりなのだろうか、待てども咲夜はそれ以上何も語らない。

「・・・面倒なやつね」

「さぁ」

・・・ひしひしと伝わってくる殺気に咲夜は一瞬たじろぐがすぐに体制を持ち直して

「そんなに知りたいならお嬢様に聞いてみたら？まぁ会わせないけど」

「それは名案ね。でも、それは無理」

咲夜が戸惑いの表情を見せた。知られたくないことの確信をつかれた時のような表情。

「それは、そうね。私が会わせないから」

にやりと何とも怪しげな表情を浮かべる霊夢は首を横に振る。

「いいえ。会わせないんじゃなくて、会わせることができない」

追い詰められた悪党のように顔をしかめた咲夜。もはや反抗する様子もなく、それ以上何も言おうとはしなかった。
大穴が、深呼吸をするように不気味な空気を吐き出してくる。

「・・・流石は紫。障子にも壁にもスキマにも目があるのね」

霊夢が空中に視線を投げると、にゅっと空間に亀裂が現れる。

「うふふ。あなたの主、随分と血相をかえて飛んでいったみたいだけど・・・。何も無かった、とは言わせないわよん？」

流石にこれは予想外の侵入者だったようで、咲夜もついに観念したように大きくため息をついた。

「全くあなたたちは・・・。とはいえ、私も大したことは知らないわよ？」

「隠したら陰陽玉の餌になってもらうから」

「ちょっとレミィ、いくら何でも、早過ゲフッゲフッ」

超高速で高空を飛行するレミリアに必死でついていこうとして咳込むパチュリー。レミリアは慌てて急旋回。

「ああもうほら、背中につかまって」

パチュリーを背中に乗せると再び超高速で飛行を開始するレミリア。早過ぎてパチュリーはうーあー唸っているが、止まる訳にはいかない。

「パチェもよーく地上に目を凝らして」

「あ～れ～、早過ぎるぅぅ～」

仕方ない、とレミリアは軽いため息を漏らすと、半分程に速度を緩める。

「は・・・はぁ。死ぬかと思ったわ」

「やっぱりパチェは毎日外にでるべきね。体が鈍ってるのよ」

それより・・・と、レミリアは続ける。

「あいつ、どこに行ったと思う？」

パチュリーは魔法書に目を下げる。

「魔女をいち早く見つける方法は・・・」

暫く本をめくっていたが、やがて指をバシっと東の方角へ指す。

「あっち」

野菜サラダに牛肉のステーキ、フランスパンに魚のムニエルと、テーブルに並ぶ豪華な食事に魔理沙とフランドールは目を輝かせていた。

「すげぇなこりゃ。アリスの人形がここまで料理上手だったとは知らなかったぜ」

「人形を操ってたのは私なんだけど・・・」

そんなアリスの呟きには耳もくれず、自分達を待ち受ける料理に早速ありつく魔理沙。アリスの家にきて食べてばかりだが、当の本人はそんなことお構いなし。かくアリスも何故か魔理沙の食べっぷりを微笑んで眺めているのでよしとなるが。

食べ終えるのは一瞬で、三人ともご満悦といった表情。

「っしー、食った食った。うまかったぜアリス。ありがとな」

「ありがとー！」

魔理沙に続いてフランもお礼の言葉を言う。アリスがみるみる笑顔になっていくのは言うまでもない。

「そいじゃ、私は帰るとするかな。フランはどうするんだ？」

との魔理沙の問い掛けに対し、フランドールは無反応。機嫌を損ねた様子ではないので、魔理沙はもう一度尋ねてみる。

「どうするんだ？帰るなら送ってってやるぞ」

「あそこにはもう帰らない」

背筋が凍るような低い声だった。この感じ、かつて魔理沙は一度だ

け経験した記憶があった。あの吸血鬼、真っ赤な月のすぐ下。

『・・・・・・。』

その言葉と全く同じ口調、全く同じ威圧。

「魔理沙のお家、行ってみたい！」

次に放ったその言葉は、魔理沙が最初に抱いたいつものフランドールの印象だった。凍り付いた場にお湯を注ぐように魔理沙は言う。

「ああ、じゃあ今日はそうしようか。んじゃアリス、また来るぜー」

そう短く言葉を切ると、扉を開けて二人は去っていった。

残されたアリスはただ茫然と、その場に立ち尽くしたまま動こうとはしなかった。

ガン、ガン。

乱暴に扉を叩くと、一人の魔法使いがのっそりとでてきた。

「あら、あなたたち。何の用よ」

扉の外に突如現れたレミリアは苛立ちを隠そうとしない表情。

「アリスとかいったわよね。・・・黒いのはどこだ」

突然意味不明なことを物凄い剣幕で言われ困るアリスに、パチュリー。

「魔理沙のことよ。言った方が身の為よ、早くしないとレミィが何するかわからないから」

「わ、わ、わかったわ、言うわよ。・・・なんなのよ、こんな夜遅くに」

「人は私を夜の王と呼ぶ。夜の方が力も数段増すからね」

アリスは深くため息をつくと、重い口を開いた。

こじんまりとした家の中、両手を広げてバタバタしながら駆け回るフランドールを魔理沙は必死で制止しようとする。

「すごい、すごい！これは何？・・・こっちは！？」

魔法店を経営している魔理沙の自宅には至る所にマジックアイテムが転がっている。それらが珍しいのだろう、フランドールは部屋中のマジックアイテムを手に取っては振ってみたり投げてみたり壊してみたりした。

「はっはっはっ。私に似てすごいパワーだな！だからこれ以上はやめような、うんやめてくれマジで」

虚しく嘆く魔理沙を尻目に全力全開のフランドール。ものの数分で自宅が廃墟になってしまったのを半開きの口で棒立ちし眺める魔理沙。そんなことは我知らず、暴れ疲れたフランドールはちょこんと

椅子に座る。潤んだ瞳を細めている。

「ああ、もうこんな時間か」

フランドールの様子を見て漸く気付く。午後１１時。フランドールのような子供は普通、もう寝る時間である。

「まー布団はちょうど二つあるしな。よし、フラン。そろそろ」

そこで言葉は切れた。

魔理沙が振り向いた先に、窓の外を血走った瞳で睨みつける『悪魔』の姿があったから。

何かを憎み、怨み、襲わんと怒りを込めたその表情は悪魔のそれと見分けがつかなかった。

それを見てしまった魔理沙はその表情に吸い込まれてしまったかのように視線を外すことが出来ず、言葉を発することも出来ず、呆然と立ち尽くしてしまった。

「くる」

あのときと同じ、畏怖する声。もはやそこにいるそれは、魔理沙の知っているフランドールではない。

「私は」

酷い頭痛がした。悪魔のような瞳に、催眠されたような。

「もう」

フランドールは目を見開いた。それで魔理沙は漸く我に返る。それと、ほぼ同時だった。

「・・・！？」

視界が紅に染まった。深夜零時。日の出にしては早過ぎるし、その光は強烈過ぎた。この感覚、魔理沙はこれが初めてではなかった。狂おしい程に紅い月、紅い夜、そして。

「お久しぶりね、魔法使いの霧雨魔理沙」

再開を喜ぶはずの言葉は相手を圧倒するに十分なものだった。
その容姿、見間違えるはずもない。
しかして以前見たそれとは違う、絶対的な圧力を纏って。

ただ目の前の大地に君臨していた。

「やってくれるわね。あなたには本当やられてばかり」

口戦的な魔理沙が、何一つ言い返さない。

「今までは見逃してやってたけど残念」

両手に纏う紅の渦。攻撃するよりも威圧するためのものに見える程、
それは波打ち猛る。
弾幕なんて生易しいものを彼女は放とうとしているのではない。あ
れはもう。

「血をもって償え」

身震いした。幼き容姿の彼女の言葉とは思えない。とにかく、この場から逃げ出したかった。でも、それすらもさせてくれない。一歩でも動いたら一瞬で消されてしまいそうなこの恐怖に、魔理沙はどうすることもできない。

「待って、レミィ」

レミリアの背後、黙っていたパチュリーは不意に口を開く。

「あれ」

といって指さすのは魔理沙の家の玄関前。殺風景なその光景の中に、それはいた。

「・・・ふふふ。なかなかツイてるじゃないの、パチュリー。まさか、まだ一緒にいたとはね、ねぇ、フランドール」

名を呼ばれてもなお扉の前に立ち尽くしたまま動かないフランドール。レミリアの腕に纏っていた紅い渦が徐々に薄れていく。

「フラン？何やってるんだ。危ないぞ！」

漸く魔理沙も恐怖から開放され、慌てた様子でフランドールに忠告。

「ツイてる？違うわレミィ」

パチュリーが言う。

「最悪の事態よ」

草も木も、深い眠りについた。

第三話◆闘宴

「門番、門番！」

「美鈴ですってば咲夜さぁん」

紅い大門のすぐ手前、咲夜が呼び出すのは紅魔館の門番、紅美鈴（ほんめいりん）。

「そんなことはいいから、ちょっとここ頼んだわよ」

キョトン顔の美鈴。頭の上の疑問符を察したか、咲夜はため息を交えて

「ちょっと面倒な事になったものでね。誰も入れさせるんじゃないわよ」

「ああ・・・はい。わかりました」

歯切れの悪い返答だったが咲夜はお構いなし。闇に沈んだ空目掛け、消えた。一人取り残された美鈴。彼女は上司には忠実、咲夜を追って飛ぶことはなく、ただ庭の掃除を続けるのであった。

紺碧の闇に浮かぶ月は、限りなく地上を紅く照らす。それは絶対に有り得ないはずの光景だが、実際こうしてそこに存在していた。紅い、悪夢のように冷たい紅色を放つ二つの月。

「最悪の事態？なによパチェ。どこか遠くに逃げられてた方がよかったのかしら？」

「そう。・・・少なくとも、彼女と一緒にいるよりはね」

少し考えるように腕に顎を乗せていたが、すぐにはっとした表情を浮かべる。そして、先程よりも強烈な視線を魔理沙に送る。

「あーもう、人間って本当使えないわね。こんな人間の、どこを気に入ったのかしら」

「何にしても、無理やりにでも連れ戻さないといけないんじゃないかしら？色んなことのために」

「当たり前。こんなに月も紅いのだから、本気でいくわよ」

魔法の森上空の四人。フランドールは血走った瞳を延々とレミリアへなげ続けている。

「・・・まぁ、一度だけ聞くわ。フランドール。お屋敷に戻りなさい」

「いやだ」

即答だった。答えるとフランドールは魔理沙の方へ、今度は淋し気に視線をやった。虚ろな瞳が、魔理沙の体を動かした。

「・・・マスタースパーク！！」

光の魔法が、あっさりとレミリアをとらえる。相手は吸血鬼。だったら光には弱いはずだ。単純な思考ではあるがその光線は圧倒的な破壊力を秘めている。

「何だか訳ありみたいだが、フランにこんな目をされちゃーそう簡単に返す訳にはいかないな」

光がおさまると、レミリアの前で本を開いたパチュリーの姿。

「どうやら私の怒りをかうのが上手いようで。まぁいいわ、私はフランドールをどうにかする。パチェはあの人間を止めてちょうだい」

刹那、レミリアの頬を紅い閃光が掠めた。

「っ？」

咄嗟に身をよじり何とかかわしたが、下手をしたら直撃していただろう。その閃光は自らの攻撃とは似て非なるもの。幼さの中に爆発的なエネルギーを振るうその攻撃が出来るのはただ一人。

「帰れ。嫌なら殺す」

近くで聞いた魔理沙はただ凍り付くしかないような声色。それを浴びせられたレミリア本人も表情を濁したが、怯んでいる場合ではなかった。

「嫌よ。あなたもわがままだけどおあいにく、私もわがままなの」

フランドールが大きく両腕を振り上げた。

「どんなに力があってもそれを扱えないのならそれは無力。今のあなたじゃ私を殺す事は愚か、攻撃を当てることすらままならない」

フランドールの両手にはいつしか紅い閃光が握られていた。剣のような、しかし真っ紅に発光をしたそれは力を振るわんと大気を震わす。対するレミリアも、自らの数倍はあろうか長い槍を模した閃光を器用に振り回す。どちらの攻撃も、当たることはない。

レミリアからしてみればフランドールの持つその閃光は予想の範囲を超えた威力で、自らの槍で受けるのには負荷が大きい。これでもフランドールは、まだ本気を出していないだろう。本気になる前に、回収しなければならない。

「さぁ、おとなしく。紅鎖・チェーンオブスカーレット」

放たれた紅い鎖はフランドールの持つ剣に絡む。これでフランドールの身動きを封じ、そこに弾幕をさす寸法だ。速さの点で言えばレミリアの方が勝っているだろう。ある程度の反撃なら避けられるはずだ。

そんな風に考えていたレミリアは、その鎖が弾け飛ぶ光景を目の当たりにして目を丸くした。

「・・・破壊の力がそこまで成長していたとは」

軽い舌打ちをのせて呟く。・・・ああ、面倒だ。もう殺してしまおうか。

そんなことも考えつつ、繰り出される弾幕を避ける。

だがしかし、そう焦ることもないのだ。初めから、運命は決まっているのだから。

「火土符・アースブレイクグレネード」

「恋符・フライングルビー！」

二つの魔法が二人のちょうど中心で衝突し、強烈な光を放って炸裂する。夜であることを忘れてしまいそうなそれに魔理沙は冷や汗をたらしながら

「パチュリーどいてくれ！フランが何をしたっていうんだよ！」

感情的になる魔理沙に対し、パチュリーは至って冷静だった。

「何をしたか、と言われればまだ何もしていない。というか、勝手に連れ出すあなたの方がどうかと思うけど」

「あー・・・それは私が無理に連れたんでなくて、何と言うか、フランがどうしてもついてきたいと言うものだからー・・・」

「勝手についてきた・・・。あなた、フランドールに何をしたの？」

突然パチュリーは声色を低いものにする。

「何したって、私は何も・・・」
「ふん、愚問だったわね。あなたのことだもの、どうせ変に話しかけてあの子の気を引いたんでしょう。故意でするのもさることながら、あなたの場合は無意識だからタチが悪い」

初めて出会ったあの時、フランドールは無口で表情もなく、まるで人形のようだった。とても何かに抵抗するといった様子はなく、またこれからもそんなことは絶対にないと思っていた。ところが今はどうだ。紅魔館には絶対に帰らないと、主であるはずのレミリアに真っ向から抗い牙を剥いている。こんな愚行、紅魔館の人間であればまずしないはずだ。

「何も知らないで、あんまり人の家に首突っ込まない方がいいわよ。ま、相手が私で助かったわね。あいにく私は人殺しは好きじゃないから・・・」

パチュリーの魔法書がまばゆい光を放つ。

「新しいスペルの実験台で見逃してあげるわ！」

魔法書は青い光を天空目掛けて一直線で放出した。どこまで伸びているのか、光の先は一瞬で夜の空を貫いた。
その光は周囲に漂う雲を磁石のように引き付ける。渦巻く雲。竜巻を思わせるかのような光景に魔理沙は不覚にも見とれてしまう。その美しさがこのスペルの武器とも知らずに。

「水月符・ルナティックレイン！」

雲の全てから、異常な量の弾幕が降り注いできた。それこそバケツをひっくり返したような大雨のように途切れることなく魔理沙を襲ったのだ。
しかし、魔理沙は慌てない。どんな時でも魔法使いは冷静でなければならない。あらゆる状況も瞬時に判断し、それに対して最も有効な一手を打つ。それが魔法使いの強さなのだ。
右へと旋回を開始する魔理沙。パチュリーを捉えようと弾幕の密度の薄いところへ逃げながら、スペル斉唱の準備を整えていく。この弾幕の多さだ。一発で決めなければ二度目はないだろう。その為にも命中は必要最低限の条件である。

「ぐっ・・・」

見極め誤ったか、右肩に弾幕が被弾し思わず苦痛の表情を浮かべる。だが怯んでいる暇はない。弾幕の手薄な箇所に陣取ると、パチュリーに向けて両手を突き出した。

「魔星・スターライトスパークッ！！」

魔理沙お得意のマスタースパークかと身構えていたパチュリーは思わぬ発言にたじろいだ。
空に瞬く無数の星が、強烈な光を放ってみせる。
攻撃は攻撃で潰せばいい。単純かつ的確な思考のもと、パチュリーは夜空から注がれる弾幕を自分の周囲に纏わせるようにする。周囲の弾幕が薄まった魔理沙だが、パチュリーを取り囲む厚い壁のような弾幕にパチュリーを確認することは出来ない。しかし、魔理沙にとってそんなことは知ったことではなかった。
星の光が、魔理沙の腕、もっと言うなら手の先に集中する。次第に

丸みを帯びた球状に集まる光は、ぐんぐんとその光を強めていく。

「いっけぇぇぇ！！」

叫んだと同時、マスタースパークとは比べものにならない出力の光線が地面をえぐるようにして突き進んだ。

太さだけで言うならマスタースパークとなんら変わりないが、火力の違いはパチュリーの弾幕に到達した時点で歴然。普通なら目標物に着弾すれば多少なりとも威力が落ち、速度や規模が低下するところだが、このスパークはそれどころか、着弾してもなお威力を増大し続けているのである。パチュリーが張った弾幕の壁は、あっさりと貫かれてしまったのだ。

「ふぃ。・・・やりすぎたか？」

立ちのぼる砂埃。特に弾幕とスパークが衝突した場所では尋常でない黒煙が視界を遮っていた。

「おーい、パチュリー。大丈夫かー？」

流石に魔理沙も心配になったのか、そんな言葉を発していた。

「随分と余裕なのね」

不意打ちのような後ろからの声に跳びはねるようにして振り向くと、そこには服の乱れ一つないパチュリーの姿があった。まさか、と驚きを隠せない表情に加え、上ずった声で魔理沙は、

「魔法防壁か？いや、そんなもので私の魔法が防げるはずが・・・」
「何言ってるの？あなたが貫いたのはただの弾幕じゃない」

一瞬凍りつき、漸く魔理沙は理解した。確かに魔理沙が貫いたのは弾幕であって、パチュリーではない。スターライトスパークの斉唱に時間をかけている間、魔理沙からは見えない後方から逃げ出す隙はいくらでもあったのだ。そんな単純なことに気付けず素直に魔法を弾幕に撃ち込んでしまったのは、実に浅はかであった。
肩に傷を負い、膨大な魔力を疲弊してしまった魔理沙に対し、パチュリーはあの弾幕を操作しただけ。魔法使い同士の戦いは消耗戦だというのに、魔理沙は初っ端から大量のリードをパチュリーに許してしまったことになる。

「で、随分とつらそうだけど・・・まだやる？」

荒い息が隠しきれていなかった魔理沙は一瞬苦い表情をするが、やがて満面の笑みを浮かべて言い放った。

「あたりまえだぜ！」
「ふぅ。あなたならそう言うと思ったわよ。・・・だったら、そろそろ本気のスペルでいかせてもらうわ！」

「へぇ、なかなか面白そうなことやってるじゃない」
境界からひょっこり顔を出した紫はぼやっとそんなことを言う。
「見慣れない子が一人・・・。レミリアとやり合うなんて結構強い子みたいね」
地上から空の光景をまったりと眺めながら霊夢はぼやく。
「にしてもあの二人、何だか変よねぇ」
「変？」
「んーま、私の思い違いかもしれないんだけれどね」
ひらひらと手をふりながら境界に帰っていく紫はほっとくとして、奇妙な四人の戦いをもうしばらく眺めている霊夢であった。

コン、コン
深夜、かわいた物音にアリス・マーガトロイドは目を覚ました。
「ああもう、今度は何！？」
罵声の勢いそのままで扉をつきとばした先に立っていたのは見慣れ

ないメイド姿の少女。服装を見ると紅魔館のメイド（というかこの辺りでメイドを雇っているなんてあそこくらいのものだが）の様子。はて、私はいつメイドを雇ったかな？アリスは首をかしげつつ聞いてみることにする。

「怒鳴ったりしてごめんなさいね。で、どうかしたの？あの我が儘吸血鬼の世話が嫌になって逃げ出してきたとか」

ふるふると首を横に振るメイド少女。アリスはますます首をかしげる。

「じゃあ、何かしら？」

するとメイド少女は畏まった様子で、

「あの、十六夜様をご存知ないでしょうか？」

十六夜と言えばあの紅魔館のメイド長、十六夜咲夜のことだろう。しかしなんでそれを探しにうちに・・・？アリスは疑問を持ちつつも返答する。

「いいえ、見てないわ」

レミリアとパチュリーが訪れたのは言わないでおくことにした。言ったら、あらぬ厄介ごとに巻き込まれるきがしたから。

「そうですか・・・。現在紅魔館のメイド数十名で捜索しているのですが、なかなか見つからなくて困っておりまして」

なるほど、館主に図書館長、メイド長までいなくなったら流石に館の人も慌てるわけか。

「という訳でして、この付近を捜索中のメイドがまた何名か訪れると思いますので、何か進展があったらお伝え下さい」

「ちょっと待って」

・・・ということは、またこんな風に何度も起こされて、その度にいちいち問答に付き合わせられないといけないってこと？最近ただでさえ寝不足だってのに、それじゃあおちおち寝ていられないじゃない！

心中で散々愚痴ったアリスは、みるからに面倒臭そうな顔で

「あーもう分かったわよ。何だかよく分からないけど、館主と図書館長、そいでメイド長が見つかればいいのよね」

「あれ、レミリア様とパチュリー様のこと、何でご存知なんですか？」

「ちょっと前に押しかけてきたのよ。魔理沙はどこだー！ってね。だから多分魔理沙の家にいるか、いなくても手掛かりくらいは残ってるでしょうね」

メイド少女は少し困った顔をした。

「・・・分かったわよ。案内するわ」

どうせ解決しなければまた別のメイドが訪ねてくるんだろう。だったらさっさと連れ戻して貰えばいいじゃないか。

それに、少しだけ魔理沙も心配だったり。

「ありがとうございます。ではすいません、早速お願いします」

「まぁそう遠くはないからゆっくりいきましょう」

アリスはメイド少女を引き連れ、深い深い森の中へと消えていった。

「紅戯・スカーレットゲーム」

レミリアは静かにスペルを唱える。紅槍を握りしめ、小さく息を吸う。

攻撃か？そう悟るもフランドールは突進を開始した。手中には紅剣。この勢いでは受け止めるのも至難の業。だが、レミリアにはそれを到達させない自信があった。

空を覆う、大量の弾幕が自信を確信へと変えた。

「・・・」

スペル宣言と時間差のある弾幕出現で完全に不意をついたにも関わ

らずフランドールは止まろうとしない。

「全く、無鉄砲というかなんというか・・・。殺してしまってもも文句は無しよ」

ナイフ、巨大球、小球、火炎弾・・・。あらゆる弾幕が、紅い色に染まった弾幕が猛進するフランドール目掛けて放たれた。弾幕というよりはもはや紅い壁のようであった。これを避けられるはずがない。勝った！

心中で高らかに勝利宣言をするレミリア。その考えがいかに軽率か、一瞬後に思い知らされる。

「あぁ・・・！？」

奇声があがる。目の前で突進するフランドールを撃ち落とし、勝利を掴んだはずの状況で。

視線を落とすと、自分の腹部を貫通する紅い刃が見えた。それを中心とし、薄ピンクの衣装が真っ赤に染まっていく。まさか、と思い振り返ると、忌ま忌ましいあの悪魔の姿が『二つ』。紅剣を片手に、無表情でレミリアを眺めていた。

「禁忌・フォーオブアカインド」

ぽつり、どちらとなくフランドールは呟く。フランドールが二人、つまりは分身か、はたまた幻影か。

フォーオブアカインド。ポーカーの役でいうフォーカードのことである。同名カードが四枚、それが一体何を意味するか。

紅い刃を素手で掴み、無理やり引き抜く。二人のフランドールは追撃してこないのは幸いだったが、抜き去った途端に大量の血が溢れる。見ているだけでも悍ましい光景であった。

「ふふふ・・・」

そんな状況下で、レミリアは笑っていた。

「そう、スペルを使えるのね。娯楽の為に与えたトランプが、まさかこんな発想の種にされるなんて・・・」

傷の痛みを感じていないのか、流れていく血液をものともせず、不気味に笑った。

「分身の術、といったところかしら？フォーオブアカインド、つまりは四人への分身。私の弾幕で消し飛んだので一人。あなたたちで三人、そして・・・」

遥か上空、紅く煌めく月を見上げ

「そこで高みの見物をしてるあなたが本物ね！」

言うが早いか、その手を彩っていた紅槍を月目掛けて全力投擲。鋭い一撃は空を切ったかのように思えたが、ある程度のところで爆発。激しい爆発を巻き起こした。

同時、レミリアを取り巻く二人のフランドールは、まるで映像の電源を切ったかのように、はじめからいなかったのではないかと錯覚してしまう程一瞬で消えてしまった。月を背に佇むは悪魔の姿。髪

が乱れている程度で、目だった外傷はない。

「あの速さを防ぐなんて・・・」

こればかりはレミリアも驚かざるを得ない。完全に不意をつき、驚異的なスピードで紅槍を投げたにも関わらずフランドールは無傷である。力だけで言うならば、フランドールの方が一枚上手か、辛くも思い知らされてしまったのである。

「・・・まぁ、いいわ」

だからと言って、レミリアが怖じけづくなんてことは有り得なかった。

「少し見くびっていたのは認める。だけど・・・」

紅槍が右腕に一つ、そして、左手に一つ。

「もう手加減は無しよ」

刹那、空が紅に覆われた。

第三話◆闘宴（後書き）

まとまりのない終わり方。残念

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1049e/

我を隠すは紅き月か

2010年10月10日08時39分発行